

授業の風景

—ブリスベンで日本語を学ぶ子ども達—

ニシムラパーク葉子（旧姓：正野）

1. セント・リタズ・カレッジから返事が来た

1990年1月28日早朝、ブリスベン空港に初めて着き、29日にはもうセント・リタズ・カレッジの職員室で、教案を練っていた。カレッジと言っても短期大学ではない。教えるのは8年生から12年生(12才～16才)までの中高生だ。

オーストラリアに行ってみようという意見に夫もしぶしぶ同意してくれたのが1989年の春のことだ。いろいろ資料を集め、オーストラリアの各地の学校に履歴書を送り始めたのが夏。もちろん日本語を教える教師のポジションをねらって、である。そのうち、日本ではたいへん多い語学専門学校というものが、クィーンズランド州ではとても数が少ないという事を知った。さらに中学高校で教えるのも、公立校の場合は、州教育省の公立教員用教師登録というのをしなければならない、という情報を得る。が、その為には最低二教科を教えるなければならないなど、いろいろな難関があり、公立校はあっさりあきらめる。私立なら状況は少し楽だということで、あちこちに手紙を出しているうちに、最初、ブリスベン・ボーイズ・グラマー・スクールというブリスベンでは名門と言われている学校からいい返事が来た。しかし、それは10週間(一学期)だけの非常勤ということであったので丁重にお断りした。そして次に来たのがセント・リタズ・カレッジからの返事であった。”本校は、生徒数約640名のカトリックの女子校であります。1990年度の8年生から12年生までを教えられるフルタイムの日本語教師のポジションがありますが、興味がありますか。面接に来られますか。”というような内容であった。

私は中学高校生の頃から、中学高校の先生にだけはなるまい、と心に誓っていた。教えるなら、本当に習いたい人が集まる専門校で、と固く固く心に誓っていた。にもかかわらず、この手紙には、ひどく感動し、行きます、行きます、という2つ返事で、受けたのであった。何度かの校長との電話でのインタビューの後、正式に決定。これが、1989年、クリスマスの直前であった。年末年始をはさんで、オーストラリアのイミグレーションから1年のワーキング・ビザがおりたのは、なんと1月24日、出発の3日前であった。

今から思えば、非常に、無謀で、めちゃくちゃなやり方ではあったが、なんとか1月29日に始まる新学期に間に合って、私は、とても満足であった。

2. 初めての授業

私の教師としての経験は、日本では10年以上あったのだけれど、主に、日本人の熱心な大学生及び成人のクラスで英語・英会話を教え、かつ在日外国人に日本語を教えていた。

セント・リタズで、新学期が始まるやいなや、自分が日本では如何に恵まれた幸せな、教師人生を歩んでいたか思い知らされる。

かつて日本で自分のクラスではまず起こり得なかった状況がそこに展開したのである。まず授業は、生徒を着席させるところから始まった。教師が教室に入って行っても、誰もおしゃべりをやめないし、だれも「キリツ！レイ！チャクセキ！」などとは言ってくれないのだ。ようやく全員が座ったところで次に黙らせなければならない。クラスによっては、ここは幼稚園か一年生か、という感じすらしてくる。それが最年少の八年生でも、私より大きく成長した子が多いので、とてもアンバランスな感じがして非常にやりにくい。オーストラリアのティーンエイジャーというのは、やたらと活発、元気、声が大ききときているので、なまじっかな声じゃ、全然、ききめがない。学生の時、演劇部で多少なりとも発声や、声のコントロールのし方等を経験しておいてよかった、と真剣に思ったものである。もちろん、クラスによっては静かなクラスというのもあるのだけれど、私はその年よほどついていなかったに違いない。どのクラスにも、どのクラスにもあひるのように、ガアガアしゃべる生徒がいた。さらに、アテンション・シーカー(自分に注意をひきたくて、無意識のうちに不適當な事をする子ども)というのがいた。例えば、エンピツや定規等で机をたたいてリズムをきざんだり、あきらかにばかげた質問で話のコシを折ったり、何度注意しても鼻うたをやめなかったり…。

普通の生徒でも、やたらとハイハイと手を上げる。初めの授業を始めようとした、その時。次々に生徒が手を上げた。何だ何だと思いながら指名すると、

「先生、暑いんです。窓を開けてもいいですか。」

「先生、手がねとねとするから、洗いに行ってもいいですか。」

「きょう、〇〇さんの誕生日なんです。みんなで『ハッピーバースデー』を歌ってもいいですか。」

「先生は、どこから来たんですか。東京ですか。」

「先生、今日は何をするんですか。」

……今、それを言おうと思ってるのに、みんなが言わせないんじゃないか。……と思う私。

これは本の一例であるが、そういう事を、次々にかわるがわる、たたみかけるように、浴びせてくるのである。特に、アメリカ英語に慣れていた私は、はじめ、オーストラリアのアクセントがききとれない事が頻繁にあった。特に、12、3才の女の子のハイトーンの高ピッチの「えっと、えっと、えっと」的な英語でたたみかけられ、気が遠くなりかけたものである。生徒が手を上げたからと言って重要な事だとは限らない。とにかく何か言いたい、目立ちたいという生徒がとても多い。いくら生徒が何か言おうとしても、言わせず、睨みをきかせながら、自分の言うべき事を言ってしまう、というテクニックを身につけるのに、最初

の一学期は費やしてしまった。

例えば、宿題の答えを黒板に書かせようとした場合、“一番の問題ができる人！”という呼びかけに対して八年生の場合、確実にクラスの3/4はワッと手をあげる。しかし、手を上げた生徒の中には、一体どの問題をやれば良いのかわからない生徒、そんな宿題があったことすら忘れていた生徒までも堂々と手をあげるのだから驚いてしまう。さらにそういう生徒も指名されると一応黒板までやって来て、一応チョークを持って、ウロウロし、“えーと、何をやるんだっけ”というような事を言う。そういう生徒も、せっかくやる気はあるんだから、叱る事によってそのやる気をなくさせてしまっただけとはいけない、などと考えて、初めのうちはニコニコしてしまっていたのだが、これはいけないとすぐ気がついた。別にやる気があるわけではなく、目立ちたいだけなのだ。やはり、きびしく「あなたはねえ、みんなの時間を無駄にしてるのよ。わからなければ、手をあげない事。」などと当たり前の事を言わなければならない。

日本人の私にとって、むずかしかったのは、叱る事だった。やはり、“言わなくてもわかってくれないか。小学生じゃないんだから、そんな事まで言わなくてもわかるだろう。”と思ってしまい、かなりのレベルまでがまんしてしまい、もうがまんできないところまで来て、感情的になってしまったという失敗もある。たとえば、授業中のペチャクチャおしゃべり。どこかで二人が始めた時点で、目くばせだけで見のがしたり、すぐやめるだろうと思ってがまんしたり、または、生徒との関係の悪化を恐れて無視したりしてしまうと、もう失敗である。クラス全体がガヤガヤ落ちつきがなくなってしまう。初めのおしゃべりを見つけた瞬間に、感情を交えず、「あなたたちは授業のじゃまをしているから、離れなさい。あなたはここに来て、あなたはそこにいなさい。」という風にすぐ処理をすると、後は、スムーズに行くと言える。こう書くととても簡単な事だが、実際に、これが何の抵抗もなくできる様になるのに、私の場合一年以上もかかってしまった。

クィーンズランド州の場合、小学校の7年の後、一部のハイスクールを除き、入試というものもほとんど受けずに、5年制のセカンダリー・スクールに入れる。大学入試も、日本のシステムとはかなり違ったもので、生徒も12年生になるまで勉強よりも、できる限りスクールライフをエンジョイしようとする。教師もしっかりクラスをコントロールしなければならない。きびしすぎるのもどうかと思うが、あなどられると、教える事が不可能になる。

さて、8年生に教えるのは、日本語そのものよりも、クラス内の躰けの方がむずかしい。悪気のない生徒ですら十分授業の妨害になりえるのだから、悪気のある生徒はもっと手ごわい。こういう生徒を如何にコントロールしていくかというのが、8年生に限らずどの学年でも、重要なキポイントとなる。一年目は、教室内の騒音(生徒の声)に為に、神経性のじんましんを患った程なのである。日本で甘やかされてきた教師のちょっとしたカルチャー・ショックである。

3. 日付けを教える

カリキュラムの関係で、セント・リタズ・カレッジでは”日付け”を勉強するのは10年生である。まず、月の名前を紹介する。一から百までの数字はもう習っているので、「一月、二月、三月…」という呼び方は「あ、簡単、簡単」とすぐに覚えてしまう。次に、「一日、二日、三日…」を勉強するが、書くのは簡単だが、読み方が、そう簡単にはいかない。日本人にとっては聞きなれていて、なにげなく使っている言葉も初めて聞く生徒にとっては、一日から十日まではまるで10個の新しい単語であって、1つ1つ覚えなければならない。「先生、どうしてイチニチ、ニニチ、サンニチと、言わないのですか。その方が簡単でいいのに。」と質問とも文句ともつかない事を言う生徒もいる。そういう時には、日本語の歴史を説明するのも良いが、

「じゃあ、英語はどうでしょうか。日付けは日本語よりやさしいかもしれないけれど、日本語では一月、二月と言うところ、英語では **January, February**…と長いスペリングの名前があるでしょう。私達も英語を勉強している時、覚えるの大変だったのよ。」

という風に言うと、たいいていの生徒は、すんなり納得。しかし、納得したからと言って覚えられるとは限らない。授業中に覚えさせないと、自発的家庭学習をする生徒は非常に限られているので、クラスの半数以上は覚えない。一年目は、とにかく覚えなさい、と日本式で覚えさせたけれど、このやり方はあまり成功したとは言えなかった。二年目からはこちらも作戦をねって、歌にしてみた。歌といっても、オーストラリア人なら誰でも知っている「オールド・マクドナルド」のメロディに、ただ♪ツイタチフツカミッカ、イーアイ・イーアイ・オー♪とことばをのせただけなのだが、生徒は大よろこび。「じゃ歌ってみましょう。」と促すまでもなく、「もうやめて」と言うまで、みんな大声で歌ったのである。おかげで、その年の10年生は日付けを、苦勞せずよく覚えることができた。日本では、勉強というと、コツコツ努力、苦しい試練というイメージがあると思うのは私の錯覚だろうか。ここでは、何事も楽しくなければならぬ。学ぶ事は楽しく行われなければならぬと、非常に大切な事を生徒に教えられた。

4. ひなまつりとセクシズム

この月、日を教える課で、日本の祝日や、お祭りについて、何月何日は何の日で、どんな風に祝うかという話しもする。やはり、文化の日や天皇誕生日よりも、ひなまつりや子どもの日に興味がわくようで、いろいろな質問がとんでくる。

初めての年の10年生を相手に話していた時のことである。ひな飾りや、カブトや、こいのぼりなどの写真を見せながら、女の子の祭りはこの様に、男の子の祭りはこの様に祝います、という話を一通りした後で、

「五月五日は、今は子どもの日となり祝日となっていますが、三月三日は祝日ではありません。」

とつけ加えた。そのとたんである。急に、クラスがザワザワとざわめいた。一人が手を上

げるのも、もどかしく

「どうして？男の子の祭りだけ休みにして女の子の祭りは休みじゃないなんて、すごく不公平！」

と、まるで自分にもかかわる一大事の様に熱のこもった、ちょっとカン高い声で言った。私は少々たじろぎながらも

「五月五日は、子どもの日になったから、男の子も女の子も休むんですよ。」

と、答えた。すると他の子が聞いた。

「じゃあ、今は、女の子も、五月五日に、ひな祭りをするんですか。」

「いいえ、ひな祭りは、三月三日にします。」

「やっぱり差別だ。」

「そんな セクシズム(性差別主義)に、日本の女の子はだまっているんですか。」

「誰が、いつ、決めたんですか。」

「日本には、男女平等という考えはないんですか。」

こうして、ひな祭りから、大いに日本のセクシズムについてもりあがってしまったのである。考えてみれば、その通り、非常に不公平な取り決めだったのかもしれない。または何か、どうしても、と理由があったのかもしれない。正直なところ、誰が、いつ、どういう理由で、決めたのか、私も知りたい。日本における性差別には日本に住んでいた頃、自分自身も、かなり嫌な目にあい、反発もし、失望もしたのだけれど、あらためて、15才のオーストラリアの女の子達に糾弾されると、弁解したくなる様な、説明したくなる様な、同時に、この子達に説明しても、とうてい、日本の社会構造を理解させることはできないだろうと考えてしまう、真に複雑な気分になった。

5. 楽しい授業を目指して

四年間のセント・リタズでの教師生活を振り返ってみて、いつも時間に追われていた様に思う。モーニング・ティと呼ばれる朝の中休みも、昼休みも、たいていの教師は、食堂の方へ行って、それぞれ談笑しながら食事をするが、私には、いつもそんな余裕はない。ほとんど、自分の机で、サンドイッチを片手に、教案を練っている事が多い。授業そのものよりも、テスト作成より、またその採点よりも、教案を練り、それに必要なマテリアルを作成する事に、一番多くの労力と時間を使う。というのも、如何におもしろく、生徒の興味をひく授業にするか、単なる練習問題ではなく、ゲーム的感覚で楽しめるアクティビティを如何に工夫するかという事を、考えなければならないからだ。

いろいろな他のテキストを参考にする事も多いが、日本から出版されている物は成人を対象とした物が多い。扱う文型は同じでも、使われている語いや、シチュエーションが中学生には合わないという場合がよくある。

アイデアに困った時に、よく助けてくれるのは、ドイツ語やフランス語の教科書である。特に新しい中学生用のテキストは、生徒を楽しませようというサービス精神に富んでいる。

ゲームや、クイズも豊富である。あるドイツ語の教科書の場合。ゲームでもクイズでもない、単なる1から10の教え方の導入部分であるが、ボクシングの絵がかいてあり、テープには、荒々しいボクシングの試合の実況の様なものがある。そして、片方のボクサーが、ドサリとたおれる音、歓声、すかさずレフリーがドイツ語で、1、2、3…10まで数える。

これを、8年生の教室で使った場合、多分このボクシングの打ち合いの音で、一気に、生徒はテープに興味をひかれるにちがいない。そして、何の説明も必要とせず、状況を理解し、1から10の教え方についてはいつかゆけるだろう。レフリーのまねをして、床をバンバンたたきながらリピートする生徒もいるかもしれない。これは本の一例にすぎないが、この様に、他の外国語の教科書には、いろいろ参考になるアイデアが豊富なのである。

ここセント・リタズ・カレッジでは、他の多くの学校と同様に、8年生は、前期にフランス語、後期に日本語という具合に、一年に2つのちがった外国語を学習する。そして、9年生になった時に、どちらか好きな方を、外国語として選択することができる。もちろん、どちらも選ばず、全く外国語を学ばないという生徒もいるし、両方をマスターしようとする生徒もいる。

その様な事情で、8年生の場合、半年で一応のカリキュラムが終了する。半年といっても、約20週間であり、週休2日なので日数にすると、約100日、実際の授業数にすると、約60回である。この60回で、ある程度の基礎知識と、ひらがなと、20個程度の漢字を教えなければならない。しかも、この間に「日本語は楽しい」という印象を持たせる事も重要なポイントである。なぜなら、この楽しいか楽しくないかで、9年生のクラスの大小が決定してしまうからである。選択する学生の数が減ると、クラスも少なくなり、あまり少なくなりすぎると、もう日本語科の教師はいらなくなり、他の教科を教える羽目になるか、最悪の場合、学校を辞めなければならないという事態も起こりうる。他の語学の先生達も生徒を惹きつける為に、各国料理のレストランへクラスを連れて行ったり、オーストラリアに滞在している各国からの留学生をまねいて、交流をはかったりと、いろいろとあの手この手を使うわけである。

6. ひらがなを教える

さて問題は授業中の「楽しさ」である。8年生は、日本でいう中学一年生。まだまだ小学校気分がぬけきっていない。ちょっと幼稚かも…と思うようなゲームが案外好評だったりする。ゲームの実例は、後で述べることにする。8年生にとって最大の難関はひらがなである。1コマの授業(50分)に、5個ずつ、教える。「あいうえお」の日は1つ1つ、筆順を示し、「ひらがな in 48 ミニッツ」というカードのセットから、生徒の記憶を助ける覚え方を絵で紹介する。そしてその場で15回程練習させる。この「ひらがな in 48 ミニッツ」は、ここオーストラリアに来て初めて知った教材であるが、最も重宝する物の1つである。各ひらがなが絵にしてあり、短い英語の解説がついている。例えば、「う」は、おばあさんのまがった背中に、石があたって、おばあさんは「うっ。」と言いました。「う」の第一画は、

石で、第二画は、おばあさんの背中になっており、そのおばあさんは、「う！」と言っている。また「ら」は、うさぎ(ラビット)のほっぺた、とあり、絵では「ら」の字はバッグス・バニーの様なうさぎの片方の頬になっている、という具合。問題点もなくはない。例えば、ら行は、**Ra Ri Ru Re Ro** と表記されており、**Rabbit** の様に **R** で始まる単語が使われている為、どうしても生徒は「ら」を「**Ra**」と発音してしまうのだ。では他にどんな表記ができるのかというと、「**L**」でも「ら」とは違う。やはり、ローマ字表記には限界があると思う。私は一番初めに「ら行」を教える時に、特に正しい発音の練習を念入りに行う事にしている。始めに、しっかり教えなければ、まちがったくせがついてしまい修正するには何倍もの時間がかかるからだ。私の発音を聞いて、すぐに難なく、きれいに発音できる生徒と、聞いただけでは、うまくまねできない生徒がいる。なかなかできない生徒には、「**D**」の発音をさせて「**Da**」と言ってごらん。はい、今度は同じ所に舌が触れる様にして少し軽く『ら』と言ってごらん。」という風に指導している。

この発音の問題点を除いては、この「ひらがな in 48 ミニッツ」という教材は非常に有効である。

日本で教えていた時には、この様な教材は存在も知らなかったし、多数の母国語を持つ学生が交じり合っているクラスでは、思いつきもしなかった。この様な英語のものを使えば、非英語圏の学生には不公平になる。しかし、この様な物が、中国語、タイ語、韓国語、アラビア語、フランス語と、いろいろな言葉で、作られれば、随分と「ひらがなドロップアウト組」が減るだろう。

さてこうして一応一通りのひらがなが終わってから、やっと、いろいろなゲームをすることができる。一番人気があるのは、やはり、カルタ。まず、各自に、ひらがなのカードを作らせる。ひらがなは、生徒に美しい字を学んで欲しいので、大きくきれいにコピーした物を配る。生徒は、それを厚紙に貼って切り離し、一枚一枚に、自分のイニシャルを書く。とにかく何でも名前をすぐ書かせると、かなりの数のトラブルを防ぐ事ができる。

早くできた生徒には、アルファベットで、「**AIUEO**」と **50** 音をつくらせる。実際には、ひらがなセットも、アルファベットセットも、グループの数だけあれば良いのだが、各自で作らせて持たせておくと、自発的に練習する子も少なくない。こうして、その作業を終えた生徒から順に、4~5人のグループを作ってゆく。各グループは、ひらがなセットを一セット床に広げ、その周りに車座になって座る。読み手は、アルファベットセットを持ち、順に読み上げる。**HA** と言えば「は」のカードを取るという単純なカルタである。

教師が読み手になり、クラス全体が同時にプレイするやり方と、グループ毎に、読み手を決めてプレイする方法があるが、私は、自分が、読み手となり、クラス全体をコントロールする方を好む。なぜなら、グループ毎にプレイさせていた時に、あるグループは、真剣勝負とばかりに、必死になってしまい、一枚のカードをめぐって、一人が、もう一人の顔を、ひっかいてしまい、流血を見たのだ。本当に油断ができない。

このひらがなカードを用いて、他にも、いろいろなゲームができるが、教師用の大版のひ

らがなフラッシュカード(A4 サイズ)を使う赤白対抗の「ひらがな早読み大会」というのも、信じられない程、白熱する。クラスを二つに分け、赤組白組とする。各組から一人ずつ順に勝負をする。私がサッと見せるひらがなフラッシュカードを、早く正しく発音した方の得点となる。一巡した所で、点数の多い組の勝ちとなる。

逆に、生徒を黒板に出させて、私が言うひらがなを、正確に早く書いた方の得点という「ひらがな早書き大会」というのも、できる。どちらのゲームも、やんや、やんやの、応援合戦がすぐエスカレートしてしまい、隣のクラスから苦情が来てしまう程である。クラスが盛り上がるのは良いし、全員が楽しく参加し、しかも一所懸命、ひらがなを学ぼうとしているから、喜ばしい事ではあるが、隣のクラスの事を思うと気が気でないというジレンマが、常にあるのである。

もう一つ、子どもっぽいのが好かれるゲームにバスストップというのがある。一列目の一番左端の生徒が、隣の席の生徒の後に立つ。教師の質問に早く答えられた方が、次の生徒へと勝ち抜いて行く。質問は、ひらがなフラッシュカードを読ませるのでも良いし、日本語の単語を言ってその英語を言わせるというのでも良い。反対に英単語を与えて日本語で言わせる事もできる。少し進んでくると、単語から文に発展させられる。もっとむずかしいのは、日本語の質問を与え、日本語で答えさせる。「何年生ですか。」と聞いて「はい、オーストラリア人です。」という答えが返って来たり、「どこにすんでいますか。」という質問に対して、「お父さんは 45 才です。」等とチンプンカンプンな答えが返って来ると、思わず、笑ってしまう。回転の早い生徒は、即座に、質問と答えを英訳して、なぜ私が笑っているかをクラス中に説明している。まちがった生徒も、一緒になって笑っている。教室ではまちがっても良いのだという基本姿勢がしっかりと身についていて、そんな事を気にして恥ずかしがる生徒も、まずいない。

このバスストップを一ひねりして、一人に1枚ずつ「チケット」を渡し、負けた生徒は勝った生徒にそのチケットを譲る事にする。そうすると、誰が何人勝ち抜いたかというのが、チケットの数によって明らかになる。そして、最後に、一番多くのチケットを持っている生徒にプライズ(小さいおかしや小さい賞状の様な物)を渡す事もできる。

このゲームをすると、どの生徒がよく覚えているか、よく努力しているか、よく聞いているか、よくわかる。一人の生徒が、どんどん勝ちぬいてゆくと、クラス全体が、挑戦者に、声援を送り始める。そして、強い勝ち抜き者が、挑戦者に負かされた時には、拍手、声援、口笛でクラス中がまたしても、どよめくのである。

7. 8年生の外国語コンサート

教材として、あれば良いのと思うものの中に、歌教材がある。私の教室の隣はフランス語の教室で、8年生や9年生のクラスともなると、ビートのきいた”1・2・3の歌”や、アップテンポの”色の歌”というものが聞こえてくる。子ども用の歌なのかどうかわからないが、幼稚な感じはなく、ポップソングといったのりである。日本語の童謡でも最近の子ども番組

に出てくるのは、その様なおもしろい物があるのかもしれないが、私が唯一持っている日本の童謡のテープには、「ゾウさん、チューリップ、めだかの歌…」と続くのである。しかも、それを歌っている人も、大人か子どもか区別のつきにくい鼻にかかった声でうたっている。「さあ、歌いましょう。」と言っても、オーストラリアのティーンエイジャーには、全くうけない。それは日本の子ども達にも、もう時代おくれという感じを与えるのと同じだと思う。

数え方の歌や、月の名前の歌、曜日の歌、そういう内容でありながら、“かっこいい歌”に仕上がっている、そういう歌教材があれば本当に良いだろうと思う。そして、そのテープには、歌の後にカラオケ風に伴奏だけが、はいって欲しい。

セント・リタズでは、8年生の外国語コンサート大会というものが、年2回、催される。一番初め、何を歌うか決める際に例の「ゾウさん…」を聞かせて、全員のやる気をなくさせてしまった。それで、結局は、当時あるハンバーガーチェーン店の、てりやきチキンバーガーのTVコマーシャルに使われていた「上をむいて歩こう」を選んだ。もちろん、手近にテープはなかったが、そのコマーシャルで、みんなメロディだけは、おぼろげに知っていたので案外スムーズにいった。歌詞も全部暗記させた。持ち時間は5分。歌は、そのコマーシャルのせいで、聴衆は全員、てりやきチキンの歌だと思いこんでいるので、本当は日本の古い歌で、こういう意味の歌ですという説明を入れる事とし、その他の演出は生徒のアイデアにまかせた。この様な、何か創造的な事をさせた時のエネルギーはすさまじく、恐ろしく突飛なアイデアから、いたってつまらない意見まで、限りなく出てくる。その蜂の巣をつついた様な状態をまとめるのが、一苦労。一旦吹き出したエネルギーはおさえても、おさえても、なかなか静まらない。2コマの授業をさいて、ようやく、アウトラインが決まった。どの様な振り付けをするか、どんなコスチュームをつけるか、どの部分をリフレインするか等々。そしてやっとの思いで練習にはいってゆけるのである。

感心するのは、この様な場合、誰もかれも激しく参加するという事だ。どんなにつまらない事でも、自信を持って堂々と発表する。ためらったりしない。聞く側の態度は、もう少し改善の余地はあるが、明らさまに賛否を表明する。そして、どんなに、こっぴどく言われても、ひるむこともない。そして、その様なエネルギーに満ちた中で、誰一人として、どうでもいいやという無関心を装う生徒がいないという事にも驚いた。コンサートで一位になると、一人一人にチョコレートが貰えるという事が、こんなにも生徒に熱心さをもたらすのだろうか。それとも素直に楽しい事が好きなのだろうか。

コンサートの日。全員、一応、「ゆかた、又は、日本らしいコスチューム」という取り決めに従い、ホールに集まった。だが、まともなゆかたを着ている子はわずか3、4人。残りの生徒は「日本らしい」と思う物を身につけている。中国風の竜の刺繍のジャケットを着ている者、どこから貰ったのか、祭と大きく背中に書いたはっぴを羽織っている者、中には、バスローブの様な物に皮のベルトをして、ちょっとプロレスラーの様な子もいる。長い髪を丸く結って、割箸を2本、かんざし風につきさしている者、アイシャドウで、目尻を極端に長くつり上げて描いている子もいて、これが、日本人のイメージかと苦笑してしまった。歌

の内容を英語で説明する役の生徒は、一体どこから借りてきたのか、にわたりの着ぐるみを、すっぽり着て立っている。てりやきチキンバーガーのコマーシャルソングだからというので、チキンになっているのである。出番は2番目。1番に出たフランス語のグループは、派手なアクションと、テープにはいった曲を大きいボリュームでかけて、オープニングを飾るにふさわしいにぎやかさであった。これに刺激された「日本語てりやきチキングループ」は、「みんな、うちはテープがなくて、伴奏がないから、大きい声でうたおう。」

などと、ひそひそ声で確認し合っている。

さて、出番になり、私はみんなに一声、

「グッド・ラック！」

と言って、客席に残った。準備段階から、練習、振り付け、まで、できる限り生徒の自主性にまかせてきたが、いざとなると、自分の教え方、自分の姿勢が生徒の発表のどこかに反映されていそうで、やはり少しドキドキする。ステージに上がると、練習中にはふざけていた生徒も、真剣にとりくみ、今までで最高のできばえであった。私は客席から、生徒達が力を合わせて、気持ちを一つにして、一生懸命、唱っているのを見て、思わず涙が出てきてしまい、とても困ってしまった。練習の甲斐あって、6グループの中から、2位に選ばれた。賞品は、各自に小さいチョコレート。もう全員大よろこびで終わってからもうえをむーいてー”とみんな口ずさんでいた。

校長を始めとして、音楽科の先生や、演劇の先生達が、審査員であったが、次の様なコメントをもらった。

“美しい発音で、むずかしく長い歌詞をよく暗記しました。メロディも美しく、日本語がわからない人達にも良く意味がわかる様に工夫してあったと思います。文化的背景も、クラスで良く学んでいるという印象をうけました。”

8. 漢字を教える

漢字の「へん」「つくり」「かんむり」などを理解させ、覚えさせ、きちんと美しく書ける様に指導できれば理想だと思う。日本で、在日外国人に教えていた時は、学ぶ側にも正統派を目指したいという姿勢があったので、こういう教え方ができた。しかし、ここでは、だいたい、11年生か12年生になるまで、あまり、むずかしい話をしない方がスムーズに行く場合が多い。11年生か12年生になり、ある程度の漢字が書ける様になると、自然に、生徒の方から

「あ、その漢字の左の部分は、〇〇という漢字と同じだ！」

という様な発見が出てくる。その時に、説明した方が、生徒の側にとっても無理がないのである。

ここオーストラリアのシラバスによると、州によって異なるが、クィーンズランドの場合150個以上。セント・リダズでは少し余裕をもたせて300個を、8年生から12年生で教えている。

子どもが……………子
 学校へ来ました。……………**学**
 木のそばまで……………木
 シルクハットをかぶった……………**一**
 お父さんが……………父
 送ってきてくれました。……………**校**」

という具合である。

⊕セント・リタズでは多くの生徒は親に学校まで車で送ってきてもらう。

また、『暑』という字。生徒は日と土を知っている。

「太陽が大きく輝いています。……………日
 今日は暑い土曜日です。……………土
 プールにとびこもう！……………/
 あ、プールの中にも太陽が反射している。……………日

暑」

こうしていろいろな、時にはこじつけに近い様な話しを考えつつ教えているが、漢字によつては、全く、何も思いつかない、という事もある。そんな時、生徒に考えさせると、とてもおもしろいアイデアも出てきて、子どもの想像力に脱帽する場合もめずらしくない。

『私』

私は何をやってもいつもしっばい。…… 禾
 そうじをしようと思ったら、ほうぎがおれちゃった。……ム(折れたほうぎ) **私**

『弟』

弟はリモコンのサーキットで遊んでいます。
 リモコンのアンテナ……………ノ
 サーキットのレール……………弓
 大きな橋もつくって……………|
 バイパスもつくりました……………/

弟

『寒』

寒いからうちのなかで……………一
 チェックの毛布をひざにかけて……………共
 ねこをのせています……………ミ

寒

この様に、生徒達の作る話は大変視覚的なものであり、「のぎへん」は、スカートをはいた自分に見えてしまい、「うかんむり」は、うちの屋根に見えてしまうのである。それで良いと思う。

さて、こうして覚えた漢字を使って、いろいろなゲームができるが、最も私の生徒が好

んでやりたがったゲームを 2,3,紹介したい。

1つは、漢字とそれに合うひらがなをつなげて行く、漢字ドミノゲーム。

もう1つは、トランプのばばぬきの要領で漢字とひらがなのペアを、捨ててゆく「漢字ばばぬき。」

日本では、この様なゲームも最近では、幅広く開発されて来ていると思うが、こちらでは、だいたい、漢字カードというと、表に漢字、裏には、音読み訓読み、例の熟語という古いスタイルの物ばかりであったので、全部自分で作った。生徒のレベルに合わせて好きな漢字を選べるので、かえって良かったかもしれない。

もう1つは、ぼうずめくりの要領で、カードをとり、そこに書かれている漢字が正しく読めれば(又は、英語で意味が言えれば)自分のカードになる。そのカードの中には、お姫様と僧侶のカードも交じっていて、勝敗は、漢字の能力よりも運のあるなしにかかってくる。そこが、これらのゲームの人気の秘密である。誰が勝つかわからない。日本語があまり得意でない生徒も勝てるかもしれない。この一筋の希望が、あまり熱心でない生徒までも熱心にさせてしまうのである。

9. て形を教える

11年生から、本格的に、動詞の活用を教えはじめる。それまでは、多少、「て下さい。」などの言い方で、聞いたことはあるが、まだ動詞のグループ分けも知らない。

私はいつも、A3 サイズの大きい動詞表を作り、一人一人に配る。その動詞表には、10年生の終わりまでに学習した動詞と、11年生に習う新出動詞が含まれており、11年生の終わりまで使えるようになっている。上一段と下一段をまとめたグループ1と、五段動詞をグループ2、そして、カ変とサ変はグループ3として(サ変には「する」だけ)英語の欄だけが記入してあり、あとは全部生徒に記入させている。

English	～ます	ない形	辞書形	て形	た形
eat					
teach					
...					

まず、ます形の知っている動詞だけをローマ字で記入させ、その後で、他の新出動詞も教えて記入させる。そして、ます形が書きこまれたところで、グループ1と2は、どの様に違うか考えさせる。だいたい、グループ2は、「ます」の前の音が「I」の音であるという事に気がつくので、グループ1は「E音」で(上一段はグループ1の中の例外として教えている。)グループ2は「I音」であるという風に説明する。グループ3は、Do と Come だけなので、あまり問題はない。

一番初めに勉強する活用形は、ない形である。ない形は活用のパターンが単純なので、

教える方も、学ぶ方も、まだ余裕がある。そして、各自の動詞表に記入させ、発音の練習をする。「わらわない、かからない。」などの音が耳なれず、おかしく、響くのか、自分で言いながら、笑ってしまう生徒も少なくない。ない形がまちがいなくつくれる様になれば、「なければならない」「なくてもいい」などの文型を導入してゆく。

ない形の次は、辞書形、その次に、問題のて形へと進めてゆく。教えはじめた頃は、大難関だと感じた「て形」も、最近では、比較的、肩の力をぬいて、教えられる様になった。ポイントは、ただ一つ。動詞表をつくる時に、グループ2は「んで」「いて」「って」「して」と、て形にした時に同じ音になる物をまとめて、その変化のパターンがはっきり「ルール」として目に見える様にする事である。(まちがっても、動詞をアルファベット順や、あいうえお順に並べてはいけない。)

- ①読みます、死にます、呼びます。 **etc** ⇒ んで
- ②聞きます、書きます。 **etc** ⇒ いて
- ③待ちます、書きます。 **etc** ⇒ って
- ④話します、かします。 **etc** ⇒ して

生徒たちは、これをルールとして見るから、覚えようとする。ところが、ルールとして覚えるには、ちょっと覚えにくいようだ。一番理想的なのは、教師がよく使い、耳が慣れて自然に活用できる様になるという状態であると思うが、なかなか、それでは、時間がかかりすぎる。

そこで、このパターンを覚えやすくする為に、「詩」の様なものを作った人がいる。私はその人の事をよく知らないが、オーストラリア人の日本語教師だということである。

これは、ます形の語幹をベースにしている。

- ①の場合 み、に、び ⇒ んで

Mini bike has bende.

ミニバイクは曲がっちゃった。

- ②の場合 き ⇒ いて

Kids like vegemite.

子どもたちはベジマイトが大好き。

- ③の場合 ち、り、い ⇒ って

Chili is hottest.

チリは一番辛い。

- ④の場合 し ⇒ して

Ship's owner is shifte.

船の持ち主はうさんくさい(shifty)。

ます形の語幹の最後の音が、文の始めにあり、て形の音が、文の最後の単語にかくれているのが、おわかりいただけたでしょうか。この様なアイデアは、ネイティブ・スピーカーの教師にはなかなかおもいつかないものだと思う。英語を話す学習者には、かなり有効で

あるので、ここに紹介した。

しかし、有効であると言っても、この詩を暗記させたら、全員が、まちがいなく、て形をスラスラ使える様になったという事ではない。これは、単なるバックアップであり、忘れた時には、すぐに記憶を呼び起こせるという安心感を与えるにすぎない。動詞表も然り。要するに、お守りの様なものなのである。

生徒は、て形を導入したところで、かなり心理的に圧倒されるようだ。「複雑だ。」「これ、全部覚えなさいといけないんですか。」「テストにも出るんですか。」「もう、だめ。日本語、落としそう…。」というのが、典型的な反応だからこそ、すがる何かが、要るのである。どうしても、「聞いて」「買って」等のまちがいが、半年以上、出てくるし、「置いて」と「起きて」は12年生になっても、やはりまちがうのである。気長に、訂正しつつ、見守ってゆくしかない。大切な事は、できるだけ、“て形ドロップアウト”者を出さない事だと思う。なぜなら、この活用をマスターした後で、表現の範囲が、ぐんと広がり、本当の語学の楽しさを味わう事ができると信じるからである。

10. 「日本語で、ステップ・マザーってどう言うの？」

8年生で、「家族」というトピックを勉強する。父・母ではなく、まずお母さん、お父さんという言葉を読む。お兄さん、お姉さん、弟、妹と続く。当然、これらの言葉を習ったところで、自分の家族について、書くなり話すなり…という練習へと移ってゆく。毎回、この段階で出てくる質問は

「ステップ・マザーは、日本語で何と言うんですか。」

「ステップ・ブラザーは？」

というものである。要するに、彼女らは、両親の離婚を経験していて、さらに、両親の再婚によって、二度目の母親、父親と共に暮らし、場合によっては、その再婚によって新しい兄弟姉妹を得ているのである。

辞書によると、継母、ママ父という単語もあるが、まさか、

「私のお父さんは45才です。継母は43才です。」という様には使えないだろう。初めは、「ステップ・マザーも、マザーなんだから、“お母さん”を使ってもいいですよ。」

と言っていたが、

「でも先生、私は、いつもはステップ・マザーと住んでいるけれど、週末は本当のお母さんの所で過ごすんです。だから、区別して書きたいんです。」

と、一人の生徒から言われた。なるほど、言われてみれば、その通りである。もちろん親は離婚しても、彼女にとってみれば、母親は母親であり、その関係は維持される。ステップ・マザーを、「ファーザーズ・ニューワイフ(お父さんの新しい奥さん)」と呼ぶ子ども達すらいる。私達日本人の家族観と、かなり、違った家族観を持っていると感じる。しかし、現実には、シングル・ペアレント、及び、自分が生まれた時とは違う親を持つ子ども達の割合は、かなり高くなっている。日本でも、多分、同じ様な傾向にあると思うが、8年

生、12、13才の子ども達が使う言葉として、何と言うのが適切だろうか。

私は、ステップ・マザーは、新しいお母さん、ステップ・ブラザーは、新しい弟(お兄さん)と言う様に指導したが、それでいいのだろうか。

さらに、「初めての授業」の章で、少し触れた、アテンション・シーカー(授業を妨害する生徒)は、後で知ったのだが、家族は、おじいさんとおばあさんだけだったのだ。詳しい事情は知らないが、母親も父親も、その子、サラを育てる事を放棄してしまい、そのどちらかの両親に預けたという事であったらしい。

12才、13才という多感な時期に、サラは多分、使うことのない言葉を習わされ、そして自分は語りたくない家庭の事など書かされ、随分傷ついた気持ちと、反感が、授業の妨害という行動をとらせたのかもしれない。

その事を想うにつけ、ティーンエイジャーを教えるのは、難しいとつくづく思う。

サラのケースは、そんなに多くはないだろう。しかし、従来、普通あるいは典型とされてきた家族構成は確実に変わりつつある。教科書の例文等にも、シングル・ペアレントのケース、ステップ・マザー(ファーザー)を含んだ家族の場合等を取り入れるという考慮も必要になって来るだろう。

追記

セント・リタズ・カレッジで教えていたのは1990年から1996年の7年間。

その頃に比べて今の教室の風景はずいぶん変わった。テーブル、OHTなどこの稿に使われた言葉は、今ではほとんど教室から姿を消し、電子黒板がほとんどの教室に設置されている。教育機関も生徒にアイパッドや、ラップトップを使わせることを奨励し、親も教師もオーストラリアの社会全体が、テクノロジーを追うことがとても大事だと考えているような印象を受ける。

どれだけテクノロジーが進んでも、それは人を助けるものであって、教師のかわりはできない。特に、人が使う言語の学びに関しては、人でなければ学習者のニーズを満たすことはできないと思う。

もちろん、教室へのテクノロジーの導入のおかげでいろいろなことが便利、あるいは可能になったが、その反面、テクノロジーの弱点が教育の現場に逆効果をもたらしていることも否定できない。

とは言え、私が現在教えている学習者(小学校高学年の継承語としての日本語学習者)は、ゲームと言えば、パソコンやスマホなど、スクリーン上のものしか思い浮かばないような世代である。この子供たちが身近に感じているテクノロジーを有効に利用しながら、昔ながらの教授法、ゲームも取り入れて、授業を豊かにしていきたい。それを実現するためには、学習者の目線を知り、共有すること、学習者の興味を持つモノに対するアンテナを張っていること、新しいことを取り入れる柔軟性が必要だろう。特に継承語の場合、子供たちの学びを、

どのように現在の彼らの世界と結び付けて、意味のあるものにするかが、学びの重要なポイントではないかと思う。

セント・リタズ・カレッジでの7年間の後、NSW州に移り、1998年から2015年の17年間、州の教育省で教材開発などに携わった。また、オーストラリアの中高生の為の日本語の教科書の共同執筆に携わる幸運に恵まれた。セント・リタズ・カレッジでの経験は教材開発、教科書の執筆の原動力となった。また、ゲームのアイデアなども教師用指導資料に入れることができ、世代を超えた先生方と分かち合えたことは大きな喜びである。2010年には、新しい日本語教科書シリーズの共同執筆を手掛ける機会に再度恵まれたが、その際、各章に歌教材を入れたいという提案が通り、十数曲を作詞作曲させてもらうという機会も得た。その章の学習ポイントが歌の中に織り込まれていて、その歌を覚えればその章のポイントが頭にはいる、という仕掛けである。当時、あればいいなと思っていたように、できるだけバラエティーに富んだ、生徒にアピールする曲作りを目指した。ある意味で、夢がかなったと言っても過言ではない。

また、NSW州教育省に勤務していたおかげで、常に州の新しいシラバス、教育ポリシー、テクノロジー、教授法などを学ぶ機会が豊富にあった。そして、さらにそれを先生方に伝える役目でもあったので、書類に書かれていることを具体化することが仕事であったと言える。例えば、Intercultural Understanding (Australian Curriculum より) とはどのようなことか。実際の授業ではどのような活動になるのか、また教材・コースデザインにどのように取り入れるのか。そのようなことを工夫することが仕事の一部であった。

そのような経験を経て、教師として少しは成長しただろうか。したかもしれない。しかし、新しいクラスが始まり、新しい生徒たちに接するたびにやはり、その生徒たちを知るところから始まる、という点では、毎回新しいスタートだ。オーストラリアに日本語教師として渡豪して以来28年。その間、ノン・ネイティブの日本語教師養成から小学生までいろいろなタイプの日本語学習者に接してきた。学習者から多くを教えてもらった。常に学ぶものがあった。

今も「楽しい授業」を目指しているが、歯ごたえのある楽しさ、学びそのものに対する積極的な姿勢を育てる、そんな楽しさを教室で実現する努力は怠ることはできない。どのレベルの授業でも、やはり私が自分の授業の中で目指すことは、日本語が大好きな人を一人でも多く育てたい、ということに尽きる。